

体育社会学専門領域

菊 幸一（筑波大学）

1. あらまし

「〇〇と社会」というとらえ方は、人間が社会を構成し社会によって人間が存在していることを考えれば、誰もが当たり前のように想定できる。では、ここでいう「社会」とは何か。他の専門領域における研究対象は、どこまでが社会と関係し、どこまでが社会と関係しないのか。「社会」というものを素朴に考えると、体育やスポーツに関連するあらゆる事象が社会に関係付けられることから、その理論や方法論（「社会」ではなく「社会学」とは何か）が明確に意識されないと、「学」の成立上、極めてやっかいな性質をもった領域だということに行き着く。一見間口が広く、社会での体育やスポーツの実態を調査しさえすれば、あるいは社会でそれが問題とされれば「何でも」テーマとして取り上げられそうであり、事実現在でもそのような動向はみられる。しかし、以下に示す内外の研究動向や科学的知見の応用からは概ね、1) 対象となる体育的事象とスポーツ的事象の学的峻別及びその相互関係への新たな認識の必要性、2) 社会事象の後追い型説明や政策追従型研究の限界、が指摘される。特に、1990年代以降の東西冷戦終結後におけるグローバル社会の到来は、社会学的な問題が、そもそも誰（何）によって、なぜ、どのようにそれとして認識されるのかという、問題化（この事象は社会学的に問いを立てられるということ）への「問い」を改めて反省する（「社会構築主義」という）傾向が出てきている。

2. 内外の研究動向

1962年から本領域は、体育社会学専門分科会として日本体育学会の一領域として設立された。設立当初は、戦後日本社会の民主化に向けた学校体育授業における小集団研究やグループダイナミクス、あるいはリーダーシップ研究等が中心であったが、1960年前後から始まる高度経済成長社会では、学卒後の職場体育やレクリエーション研究、あるいは社会体育というジャンルに推移していく。そして、1970年代の石油危機を契機とする低経済成長社会に移行していく中で、地域（コミュニティ）スポーツ、みんなのスポーツといった社会における「スポーツ」現象が中心的なテーマとなっていく。1972～81年には研究誌として道と書院から『体育社会学研究』（全10巻）が刊行され、引き続き1982～91年には『体育・スポーツ社会学研究』（全10巻）が刊行された。この間の「体育」から「体育・スポーツ」への名称変更にも表れているように、その対象は狭義の学校体育から広義のスポーツ現象へと変化している。そして、1991年に当専門領域が所属する日本体育学会から完全に独立した日本スポーツ社会学会が設立されたことにより、今日、体育社会学とスポーツ社会学が扱うテーマについてその異同が徐々に問われ始めている状況にある。このように

日本の体育社会学は、学校体育から社会体育にその研究関心を広げ、広く社会の中のスポーツ現象を扱っているように見えるが、その実は体育学者からのスポーツ研究という特色をもっている。それが特色として自覚される理由は、海外（特にヨーロッパ）の研究が大学体育という研究基盤を待たずとも（あるいは持たないからこそ）、主に社会学的な関心対象の1つとして社会の中のスポーツ現象やレジャー現象を教育としてのスポーツという価値関心から離れて自由に研究テーマを設定しているところにある。それに加えて、前述した日本スポーツ社会学会が元日本社会学会会長を含め、2割程度の社会学会プロパーによって構成されていた影響も大きい。

3. 科学的知見の応用の状況

歴史的には、戦後学校体育の学習指導要領におけるグループ学習研究や1980年代からの、いわゆる「楽しい体育」論に基づく生涯スポーツをめざす体育学習論に大きな影響を与えてきた。特に、竹之下（1975）が示した「体育の社会的構造」図とその枠組みは、いまだに学校体育と社会との関係構造（しくみ）や機能（はたらき）に関して集団的・制度的な側面とスポーツの文化的側面の双方から統合的に考える応用可能な知見を提示している。ただ、その後の社会におけるスポーツ現象（例えば、みんなのスポーツや生涯スポーツ）に関わる多様な研究は、現象の後追いや短期的な政策に追随してこれらを説明しようとする研究が多く、社会学的観点から広く体育やスポーツに関わる社会問題に対して、先見的に効率的・効果的な応用を示唆する基礎的かつ理論的な研究成果（ビジョン）を提示しているとはいえない状況にある。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき最新知見

例えば、昨今、社会問題化している学校体育や大学体育における指導者の暴力問題については、一般的に「暴力根絶」を訴求し、暴力をふるった個人を特定してその人間的な矯正を促すことだけを是とするものではない。なぜなら、現実には人類史上、暴力が根絶された試しはなく、むしろ私たちは常に暴力と「共に」現実を生きるリスクを背負っているからである。社会学的には、社会が近代化していく中で暴力に対する感度（閾値）が徐々に高まっていく人間の相互依存の関係変化を歴史的に明らかにし、その発生メカニズムを当事者の環境や制度の側面から改善し、暴力を「飼い慣らす」方向性を探ろうとする。

5. 若手研究者へのメッセージ

ここまでこのコラムを読んだ若手研究者には、社会学は難解だと思われたかもしれない。それはこれまでこの分野の研究者のほとんどが体育としてスポーツを経験し、それに基づいて社会の中に現われるスポーツ現象を（無理やり？）文化として研究しようとしてきた学的ジレンマの表われなのかもしれない。若手研究者には、自らの体育的経験を冷静に相対化し、価値自由な文化論的立場からスポーツにおける体育的性格の功罪を暴いてほしい。

6. 引用文献

- ・竹之下休蔵（1975）『プレイ・スポーツ・体育論』大修館書店，東京。

（2017年7月28日執筆）